地元学「市原を知ろう！」

平成２４年９月１４日

市原市立辰巳公民館歴史講座

（一）　知ってるつもりで知らない市原

●市原市の市名の由来

●奈良・平安・中世にかけて市原郡に上総国府が置かれた

（二）古代ロマンに満ちた市原地区

●市原市の一丁目一番地は「市原八幡神社」

●万葉集に登場する「阿須波神社」

〝旅の神様〟として崇敬されている

●光善寺は国分寺、国分尼寺より古い瓦が出土

境内には県内で一番古い石灯ろう（市原市指定文化財）が残っている

（三）市原地区周辺には古代遺跡が多数

●市原条里制遺跡

●古代官道跡

●五所四反田遺跡

（四）特殊神事の「市原の柳楯神事」（千葉県無形民俗文化財）

●柳楯が八幡の飯香岡八幡宮に到着しないと祭事・みこしが出御できない

●国府に関連した神事か？

飯香岡八幡宮は上総国府総社

似た例は全国に多い。館山市の鶴谷八幡宮の例大祭「やわたんまち」は、南房総市（旧三芳村）の元八幡神社からの清水が届かないと始まらない。正式名称は「国司際」。

相模国府（神奈川県大磯町）の国府祭（こうのまち）。六所神社（総社）の使者が榊を持って一宮寒川神社など五社のみこしを境界で迎える。五社がそろったところで座問答という神事を行う

●市原の柳楯神事の進めかた

祭り前日。柳楯司家で調整―市原公民館（出ぶるまい）―市原八幡神社―阿須波神社―柳楯の道（中道）―五所公民館（一泊）―飯香岡八幡宮（祭事・みこし出御）

市原里づくりの会

山越　国臣

携帯　０９０－８７２８－７３２４

地元学「市原を知ろう！」

平成２４年１０月１９日

市原市立辰巳公民館歴史講座

Ⅰ部　市原と上総国府

（一）　国府とは

●律令時代の地方行政組織で中央政府の出先機関。全国６０余国に行政区が置かれた。国庁（現代の県庁か）の所在地が国府と呼ばれている。その重要度によって大国、上国、中国、下国の４ランクに分けられていた。国府域内に国から派遣された国司（守、介）が政務をつかさどる政庁、国司館、正倉などが配置された。発掘された政庁跡の共通点は周囲を溝や堀で区画、南に門を開き、正殿を正面北により置き、脇殿をコの字型に配した建物配置になっているのが特徴。県内には上総のほかに下総、安房の３国があった。

上総は大国で親王任国で格が上だった。歴代の国司には、万葉歌人で万葉集を編さんした大伴家持、東大寺大仏の建立に貢献した百済王（くだらのおにきし）敬福、古代文学の「更級日記」の作者の父親である菅原孝標などの名前が見える。上総国府の解明は地方行政統括の重要拠点としての位置（規模など）、更級日記の中の記述の整合性を知る上でも一級の史料となる。

（二）　上総国府跡を探る現況

●現在は考古学的に発掘状況から有力視されていた惣者説は消えた。

古代道の発掘から稲荷台遺跡がある山田橋地区から阿須波神社、光善寺廃寺（現光善寺）がある市原地区を含めた市原台地上が国府域ではないかと考えられている。中世国府は能満地区にあったらしい。また村上説は残されている。

●市原地区があやしい。最近の発掘調査から市原説（政庁など）が注目されている。

●行政組織どうしで葛藤。

まぼろしの上総国府の解明をしたい現場。ロマンのままにしたい市長部局。地道な努力をしいる現場の学芸員の夢を実現させたい。

（三）　京都にも「市原」があった！

●歴史は市原市の方が古いようだ。市原市とのつながりを探したが、足利義満がからんでいた。「至徳」の年号がカギを握っていた。

（四）

●国府は平安末期から鎌倉、室町と中世を通じて大きく変動した。

八幡宮、山王様、光善寺など主だった寺社は集団移転した？。武家政権が市原台地にクサビを入れた可能性がある。

Ⅱ部　市原市の５０歳にジンジャーエール（神社から応援）で乾杯

●温故知新。市原市には２２０ヵ所以上の神社がある。小さな祠などを含めるとそれこそ八百神（やおよろず）。

●まつりの言われは「待つこと」。ケ（日常）―ケ―ハレ（まつり）―ケの循環性。ケばかりが続くとケガレ（ケ枯れる）てしまう。そのためにハレの日が必要で待つことが大事になってくる。ケは食物・御食（ミケ）に通じて、人間の生命力を表しているという。

●昔の国分寺台をふりかえる

●遠くへ行かなくても、見どころは満載。近くの神社へ出かけて見よう。

辰巳台地区

① 辰巳合神社。辰巳台周辺の神社を合祠していると思われる。

② 駒形神社。大厩（おおうまや）にある。馬に関係する神社で市内に唯一。祭神ウケモチノミコトほか４柱。

③ 白幡神社。山木地区の産土（うぶすな）神社で祭神はホムダワケノミコト。境内神社・道祖神社

④ 府中日吉神社。能満地区にあり通称能満神社と呼ばれている。祭神はオオヤマクイノカミノミコト。本殿は県有形文化財。こま犬に代わってサルが守護。

国分寺台地区

① 八幡神社。郡本地区にあり、祭神はホムダワケノミコト。境内社は子安神社。出羽三山神社、稲荷神社、大宮神社。元和７年８月（１６２１）に社殿改築。この際に領主の命によって郡本、藤井、門前、西野谷の４ヶ村の鎮守となる。土台の石が異常に大きく、市原郡衙の礎石ではと言われている。石質は国分寺僧寺の礎石と同じ。

② 稲荷神社。山田橋地区にある稲荷台遺跡群の名称のもととなる。境内神社は出羽三山神社、ほうそう神社、子安神社。初午祭典後にほうき草の芽を食べる慣習がある。

③ 前広神社。西広地区にあり祭神はオオヤマズミノミコト。鎮座年代は未詳だが、「三大実録」に清和天皇貞観１０年（８６８）に正六位上を前広神社へ授くとある。

④ 諏訪神社。通称「すわさま」。村上地区の産土神。祭神はタケミナカタノミコトとヤサカトメノミカト。

⑤ 戸隠神社。通称「とがくしさま」。惣社地区にあり祭神はオモイカネノミコト、アメノタヂカラオノミコト、オモハルノミコト。扁額には「総社」とある。

⑥ 根田神社。根田地区にあり祭神はアメノコヤネノミコト、スサノオノミコト、オオヒルメムチノミコト、ツキヨミノミコト。旧社名を苗鹿神社と称し宝永２年（１７０５）に再建。

⑦ 加茂神社。加茂地区の産土神。祭神はカモワケイカズチノカミ。境内社は道祖神社、八幡神社、子安神社。

⑧ 岩野見神社。岩野見地区の産土神。祭神はミズハノメノミコト。神社の扁額には水神社とあり、水を司る神か。名前の通り神社は低湿地にある。　　【市原里づくりの会　山越国臣】

公民館リレー講座

平成２９年１０月７日
主催：市原市立市津・辰巳・国分寺公民館

柳楯神事と上総国府

Ⅰ　はじめに。地域の魅力とは。柳楯神事を理解する前に

●地域を歩くことで思わぬ発見がある

●祭りについて。まつりは神様を「奉る」こと。そのことから通じて「マチ（祭り）」に変化した。日常生活はケ（気）の連続。ケが続けば気が枯れる（穢れる）。そのために人とは「ハレ」の日を設けた。正月、春、夏、秋祭り。祭りとは、エネルギーを貯めて「待つ」ことが原義。

●祭りは神迎え（宵宮）―おもてなし（本祭）―神送り（後の祭り）で構成される。要件としては①物忌み②依り代③共食いが欠かせない。

●「柳楯神事」は、昔の形態をうかがわせる神迎えの儀式

Ⅱ　市原の柳楯神事（千葉県指定無形民俗文化財）

●飯香岡八幡宮（八幡）の秋季例大祭にまつわる特殊神事で欠かせない。柳楯が届かなければ神輿が渡御できない。市原地区の司家によって調製される。

●大祭前日に、光善寺（公民館）で出ぶるまいが行われ、五所まで中道（古代官道上）を通り巡行。翌日に五所―八幡とリレーされ、神前（一宮神輿）に供えられる。

●６００年以上前の歴史がある。柳は神降臨の霊木で神輿の原型といわれる。

●柳楯神事の見どころは神を迎え、巡行中の「静」から「動」への変化。

●飯香岡八幡宮は「国府総社」。律令時代の上総国府との関連性がうかがえる。

Ⅲ　今も地域で受け継がれる伝統行事

●市原地区は、昔の集落単位の「里」の５０戸程度。秋の「柳楯神事」のほかに、一年を通じてさまざまな伝統行事が受け継がれている。正月明け早々の「出羽三山・冬行」（一月）、「卯の日祭り」（二月初め）。戸渡しという大杯につがれた酒を皆で飲み干す役員交代の儀式が名物。「出羽三山・春行」（三月）、「天王さま」（七月）、「出羽三山・夏行」（七月）。不定期で出羽三山に参拝する。「お薬師さま」（八月初め）、盆行事（八月）など。それぞれの行事は“結い”、村落共同体の精神が流れている。

Ⅳ　地元を見直そう。地域の歩き方・楽しみ方

●地域は魅力でいっぱい。身近な神社仏閣、古道などをコンパスを手に巡ってみよう。新たな発見があるはず。「こんな素敵な場所があるよ」。みなさんが地域から発信することが大事。より深めていこう地域の連携。

（市原里づくりの会・山越国臣）

幻の上総国府を読み解く

市原里づくりの会　山越国臣

ことしは市原市制５０周年。この機会に、いまだ明らかになっていない「上総国府跡」の所在地確認を歴史地理学的に、これまでの考古学的実証を加味して総合的に位置確認を試みた。

［神社配置から核心に迫る］

全国の国府跡確認調査では、国府域の四隅に神社がまつられているケースが多いことから神社配置に視点を置いた。上総国府は、これまでの発掘など確認調査で「市原説」が有力になってきた。市原地区は舌状台地の北端に位置する。推定地の北西域には万葉集に登場する阿須波神社。国府の屋敷神の可能性が高い。北東域には鬼門除けとなる日の宮神社がある。裏鬼門には市原八幡神社。市原市市原１番地に建ち、「市原市」の市名の由来になった古社。八幡地区の飯香岡八幡宮の元宮とも言われている。

［明治初期の地割図がヒント］

国府探しは、報告書の冊子に載った明治初期の市原地区の地割図が参考になった。

この中で、中央付近にある東西に走る地割が目についた。東一西の場合は建物が南面するために重要な施設の可能性が高い。マーカーで塗りつぶした。神社の配置から何やら相関関係がありそうだ。南東域には神社はないが、近くに天王崎という地名が残るため、「天王様・午頭天王（八坂神社）」があったのではないかと想定。四隅を線で結ぶと四等辺四角形になった。それぞれに対角線を引くと、マーカーの中央に乗った。

そのほかに、市原地区には３つの椿森（神社）があった。これも地割図上に記入し、色を塗った。わたしは、３つの椿森を第１（日吉神社）、第２（守公神）、第３（六所神社・総社）と想定した。

［中世は能満地区に移転？］

中世は「府中」という名称が残る「府中日吉神社」がある能満地区が有力。考古学の学者、研究者の間では定説になりつつある。

ここで注目したのが、府中日吉神社。能満域郭図を参考に、日吉神社の真北約５００㍍に「天王様」という神社があることを知った。

「もしかしたら、中世国衙は５町域ぐらいの広さでは」一と考えた。府中日吉神社を中心に５町域の国衙域を想定。

次にとった行動は、市販の３２０００分の１の市原市都市図を購入し、地図上に載る神社をすべてチェックした。神社と神社を線で結んだ。

これには驚いた。タテ・ヨコ・ナナメと線上に神社が乗った。中世国衙域の能満地区がほぼ５町域で残った。四隅に神社があるはずだ。現地調査を試みた。北東域は確認できな

かったが、南東域には「第六天」がまつられていたことが分かった。第六天近くには、妙見、国司牧など意味ありげな地名が残っていることも確認できた。能満地区の字名にも注目。「月輪寺（がちりんじ）」、「妙見」、「天王様」「居心城」「蔵屋敷」など。中世には「山王神道」がおこるという。日吉神社は天王様、月光菩薩、妙見信仰など強いつながりがあるという。日吉神社の本地仏は薬師如来だという。中世国衙は山王神道による国づくりが行われたのではないか。

中世国衙域の守護神となっているのは、鬼門（北東）が山木地区にある白幡神社、裏鬼門（南西）は村上地区にある諏訪神社。両神社とも地区内に元宮があり中世国府建設のために方位の良い所に遷座されたのではないだろうか。

［初期国府は古甲の地名が残る郡本・門前地区か？］

神社配置から読み解くと、郡本・門前地区にも、５町域のスポットが現れることが分かった。初期国府が、そのまま東方向にスライドして中世国衙が形づくられた格好だ。

市原地区の阿須波神社と藤井地区にあった大宮大権現を結ぶと初期国府の中心線とぴったりと合う。わたしは、初期国府は阿須波神社を起点に国づくりが行われ、光善寺がある北東方向を向いた国衙域が形成されたのではないかと見ている。理由として自然の支谷の向きに条里制水田との整合性、検出された大溝遺構の向きなどから。中心点と思われる地域で見つけたなぞの柱穴跡らしき痕跡の畑地の地割からも推測される。阿須波神社ー大宮大権現とを結んだ線上に古代道が乗ることから、初期国府においては「朱雀大路」が存在していたのではないかと見ている。※古甲遺跡の畑地になぞの痕跡。

［光善寺ー千草山廃寺（市原中）ー国分寺僧寺を結ぶトライアングル］

光善寺と千草山廃寺、国分寺僧寺を結ぶときれいな二等辺三角形が描かれる。千草山ー国分寺僧寺の線上には、国分尼寺が乗る。

国分僧尼寺は、何らかの意図で造られたことがわかる。

［上総国府の国づくりは、阿須波神社と光善寺が大きく関与した］

これらの国衙域を地図上に置くとさまざまなことが分かってきた。国分僧尼寺の北軸線上の振れ。７４１年の国分寺建立の詔の発令と同時に新たに上総の国づくりが行われた可能性をうかがわせる。遠の朝廷（とおのみかど）としての国府の威信を見せるために安房国の併合が行われた。そして７５７年、再びの独立時期までに国づくりが完了した。

こうした点を見ると、阿須波神社が登場する万葉集の「庭中の…」防人歌との整合性もとれてくるのではないか。

［想定地上から貴重な表採遺物続々］

設定した想定地点からは、磚や緑ゆう陶器片、蛇紋岩、古い礎石、重圏分様の古瓦片など大量の遺物が採取できた。数十か所、整理箱も５０個ぐらいになった。

［古甲遺跡の畑地からは光善寺廃寺使用の瓦も初めて表採された］

これら A・B・C 期（国府初期～中世に分けた）の国府とも台地上には５町域の国衙域はとれない。古墳時代から台地上はインフラ整備が行われ、自然の要害を巧みに生かした国

づくりが可能だったとみている。ABC時代を経るとともに、谷地、支谷を生かした複雑な戦略的な国づくりとなっている。守りを意識した、常に北を向いた国の前線、兵たん基地的な役割を担っていた。発掘例からも市原台地西端に集中していた住居跡が古墳時代を過ぎると消える特徴があるという。わたしは、この時点で水田整備（条里制）、台地上の国づくりの整備が整ったとみている。

［能満川が国づくりに大きく貢献］

市原台地と能満台地を南北に走る能満川が運河的役割を持って物資の輸送など交通手段に使われた可能性がある。現在は排水路のような小さな川だが。かつては水量豊富な川だったのだろう。

［神社３点１直線の法則］

神社配置から読み解くと面白いことに気づく。阿須波神社を起点に市原八幡神社を合わせると飯香岡八幡宮。日吉神社（第１椿森）を結ぶと能満地区の府中日吉神社。ある時代に市原台地上から移転（遷座）されたことが推定される。

ちなみに館山の鶴谷八幡宮は安房神社―飯香岡八幡宮の線上に乗ってくる。

以下が、わたしが歴史地理学的見地から推定した上総国府論。結論として、上総国府（国衙）は基本的に５町域の結界が設けられ守り重視の国づくりが行われた。国庁と重要施設を国衙域に置き正倉、官舎など諸施設は市原台地に分散配置。市原台地上が古墳時代ぐらいまでにインフラ整備が整っていたからだと見ている。また、国府が置かれた市原郡の郡名の由来だが、通説のイチイの原っぱではなく、市も立つような広い原から来たのではないか。これを証明するように市原八幡神社近くに「人市場（一日市場）」の字名の地名が残り、姥神社が建っている。神社配置から読み解いたひとつの国府探しの推定論。後は発掘調査など考古学的な面からの含致が待たれるところだ。もうひとつ残る村上説だが、極論すれば、上総国府は台地にあったのか、低地にあったのかの二つの論にいきつく。

低地説を否定することはできないが、昨今の全国的に発生している大雨による河川のはんらんなどを考えると、国庁や正倉など諸施設を置くことはリスクが大きい。暴れ川は脅威だ。上総の国は、古代から常に東北を意識していた。だから国造（国から認められた豪族）が６人もいた。常に高みから前を向いていたのではないだろうか。

以上